

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	栗田季佳
論文題目	障害者に対する態度の構造と偏見低減方法： 潜在的態度と顕在的態度に着目して		
(論文内容の要旨)			
本論文は、障害者に対する態度の構造と偏見低減方法を、潜在的態度と顕在的態度を明らかにする実験法と質問紙法を用いて、実証的に解明した社会心理学的研究である。7章、6個の研究から構成されている。 第1章「障害者に対する態度と偏見低減方法に関する研究動向」では、先行研究のレビューを行い、本研究の位置づけについて明らかにしている。1.1では障害者に対する態度に関する研究動向と顕在指標を用いる問題点、1.2では障害者に対する偏見低減方法に関する研究動向と接触理論の限界を指摘し、本論文では態度測定においては顕在指標に加えて潜在指標を合わせて用い、偏見低減方法としては社会認知的アプローチを用いるとしている。 第2章「障害者に対する潜在的態度」では、障害者に対する偏見は、意識的な部分だけでなく、無意識的な潜在的態度が背景にあることを明らかにするために、2.1の研究1「障害者に対する潜在的態度」では、大学生に対してFUMIE(Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions)テストを用いて、障害者とポジティブなイメージおよびネガティブなイメージの連合強度を潜在的に測定した。そして、大学生は一般に、障害者とネガティブイメージとの連合が強く、潜在的には偏見を有していることを示している。2.2の研究2「障害者に対する潜在的態度と顕在的態度」では、大学生に対して、偏見抑制動機をFUMIEテストの前に回答させて、動機を活性させた状態で潜在的態度および顕在的態度を測定した。その結果、顕在的態度は障害者に対する偏見がみられなかったが、潜在的態度は偏見がみられた。また、内発的偏見抑制動機が高い人は低い人よりも潜在的偏見が弱く、外発的偏見抑制動機が高い人は低い人よりも、潜在的偏見が強いことが明らかにしている。 第3章「障害者に対するステレオタイプ：人柄と能力」の研究3「障害者に対する人柄と能力ステレオタイプ」では、ステレオタイプ内容を説明する人柄（あたたかい-冷たい）と能力（高い-低い）の2つの要素から、大学生の障害者ステレオタイプを調べている。潜在的指標として潜在連合検査(IAT)、顕在的指標として質問紙を用い、障害者の能力および人柄のステレオタイプを測定した。その結果、障害者は、「あたたかい（人柄）」が「能力は低い」という両面価値的な態度が潜在的にも顕在的にも保持されていることを示している。 第4章「障害者カテゴリによる態度改善：「障がい者」表記の効果」は、前章までに明らかになったように、障害者に対する態度は、いまだネガティブであることを踏まえて、障害者に対するネガティブな態度を改善する方法を検討したものである。研究4「『障がい者』表記が身体障害者イメージと交流態度に及ぼす効果」は、大学生に対して、「障害者」あるいは「障がい者」と表記とした質問紙を配布し、障害者のイメージや交流について回答を求めた。そして、「障害者」表記に比べ、「障がい者」表記が用いられると、障害者との接触経験が有る者において、「頑張っている」「やさしい」など、ポジティブなイメージが促進されることを示している。しかし、接触経験の有無に関わらず、障害者との交流意欲は変化しないことを見出している。			

(続紙 2)

第5章「障害者ステレオタイプによる偏見低減：ポジティブな人柄ステレオタイプ」では、研究5「身体障害者に対するポジティブステレオタイプの効果」において、大学生に対して、障害者に対する人柄を想起させた群と、想起しなかった群を比較した。その結果、想起群の身体障害者に対する顕在的態度はポジティブに変化するが、潜在的態度は変化しないこと、身体障害者に関連する社会システムへの評価には影響がないことを見出している。

第6章「平等主義的動機による偏見低減：平等評価条件づけ」では、研究6「平等主義的動機が障害者に対する偏見低減による偏見低減：平等評価条件づけ」の実験1「平等の価値と平等的自己観」では、「平等は良いこと」といった平等の価値と、「平等的な私」といった平等的な自己認知のどちらが、潜在的偏見低減に寄与するかを、大学生を対象にIATを用いて調べた。その結果、平等価値の方が自己認知よりも潜在的偏見の低減に関わることを示している。実験2「平等の評価条件づけによる障害者に対する偏見低減」では、「平等」単語の直後にポジティブな刺激（例「明るい」）を提示した群では、直後に無意味語を提示した統制群よりも、障害者への潜在的偏見が低くなると結論づけている。

第7章「総合考察」では、7.1において、本論文全体を展望し、7.2では、障害者に対する偏見の構造、7.3は偏見の低減方法を述べ、7.4では、本研究の意義を述べ、7.5においては、偏見低減に向けた実践への示唆、そして7.6では今後の課題について論じている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、障害者に対する潜在的-顕在的態度を明らかにする緻密な実験と調査を用いた 6 つの研究を行い、態度の構造を実証的に解明し、偏見低減方法を提案している。

本論文の特色は以下の 3 点である。

1. 障害者に対する態度の構造と偏見低減方法を検討するために、心理実験による潜在指標と質問紙法による顕在指標の両方を用いた方法論上の新しさを持つ点
2. 障害者ステレオタイプの内容次元と、潜在-顕在次元での両面価値性を多角的、実証的に解明した点
3. 偏見の内的プロセスに着目し、平等評価条件づけによる偏見低減方法を提案し、それが多様な障害者やグループへの偏見解消の応用可能性を持つ点

第 1 章では、従来の研究を展望し、障害者に対する態度の研究は、質問紙で回答を求める顕在的態度の研究が大部分であると述べている。そして、意識レベルのプロセスを反映し、社会的望ましさなどの影響を受ける問題点を指摘している。その上で、無意識レベルでの潜在的態度を測定する重要性を主張したところに本研究の着眼点の鋭さがある。また、偏見低減のための接触理論が、現実の環境設定やメカニズムの解明が難しい点を指摘し、内的な判断過程への介入に着目した点が特徴である。

第 2 章の研究 1 と研究 2 では、障害者に対する潜在的態度と顕在的態度を測定し、大学生のもつ障害者に対する態度は、顕在的にはポジティブであるが、潜在的にはネガティブであること、さらに、潜在的にネガティブな態度を、内発的偏見抑制動機は弱め、外発的偏見抑制動機は、逆に強めていることを見出したことは、学術面、そして偏見抑制という実践面においても重要な発見である。

第 3 章の研究 3 では、障害者ステレオタイプの両面価値的構造を潜在的指標と顕在的指標を用いて、障害者の能力および人柄の次元で測定して、障害者に対して内容次元での両面価値的な態度が、潜在的にも顕在的にも保持されていることを見出している。これは、方法論的にも学術的にもこの分野における重要な貢献である。

第 4 章の研究 4 では、「障がい者」と「障害者」の表記の差異が、障害者のイメージや交流態度を、いかに改善するかを明らかにするために、2 つの表記条件の比較をした。そして、「障がい者」表記が用いられると、障害者との接触経験者においてのみ、ポジティブなイメージが促進されるが、障害者との交流意欲は変化しないことを見出している。これは、「障がい者」表記の変更による効果のプロセスとその条件、さらに、施策の効果のエビデンスを示すものとして、学術的にも今後の福祉政策を考える上でも大きな意義をもつ。

第 5 章の研究 5 では、偏見低減のためにポジティブステレオタイプとして障害者に関する人柄を想起させた群と、想起しなかった群を比較した。そして、想起群の顕在的態度はポジティブに変化するが、潜在的態度や社会システム認知には影響しないという新たな結果を見出している。これは意識レベルで働きかける顕在的なアプローチの限界を示している点で、研究と実践の両面で重要な示唆を導いている。

第6章の研究6の実験1では、平等の価値が潜在的偏見の低さと結びついていること、実験2では、「平等」という単語にポジティブな刺激を連合させる閾下条件づけによって、障害者に対するポジティブな態度が促進され、潜在的偏見が低くなることを見出している。これらは、偏見低減の方策を検討する上で意義ある発見である。

第7章では、6つの研究のデータを踏まえて、障害者に対する偏見の構造、さらに、潜在的偏見の低減方法として、平等主義に基づくアプローチの有用性を述べている。そして全体のまとめとして、顕在的態度と潜在的態度を支えるメカニズムに基づいて、先行研究も踏まえて、緻密で統合的な議論を展開し、今後の課題を明確化していることは、高く評価できる。

以上のように本論文は、障害者への偏見に関する社会的および学術的な問題意識に基づき、データを積み重ねて議論を構築し、学術面と実践面で多くの新たな成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 障害種による差異の検討、より広範な交流態度や実際の行動の検討、偏見低減のための「平等」の価値導入の根拠と他の関連する価値の検討
- (b) 潜在連想検査を支えるメカニズム、概念的意味の評価との分離、閾下条件づけから潜在的態度・顕在的態度、さらに現実世界の行動へのプロセスの解明
- (c) 長期的な学習や発達過程、長期的効果を説明するための接触理論と社会的認知アプローチの統合

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成 25 年 2 月 6 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降